

*A Christmas Carol*のメディア性

－慈善と経済から－

A Christmas Carol as Media: Interactions between Charity and the Economy

原 田 昂

北九州市立大学大学院社会システム研究科

『社会システム研究』第13号 2015年3月

*A Christmas Carol*のメディア性

— 慈善と経済から —

A Christmas Carol as Media: Interactions between Charity and the Economy

原田 昂

Takashi HARADA

要 旨

19世紀イギリスの国民作家Charles Dickensは、クリスマスを題材にした作品を多く発表した。この事実は、Dickensが現在のクリスマスを創ったと言われるほどに、Dickensのイメージをクリスマスと結びつけている。確かに19世紀はクリスマスの転換期であるが、しかしそれはクリスマスが絶対的に創り変えられたという性質のものではなく、クリスマスがメディアとして伝えるメッセージがずれたことにある。*A Christmas Carol*は、Dickensが毎年のように発表したクリスマスストーリーの最初の作品であり、Dickensとクリスマスの関係を語る上で特に重要な意味をもつ。この作品においてDickensが描くのは、まさに19世紀イギリスにおけるクリスマスのメッセージのずれ、すなわち宗教から経済へ、また神の愛から人の慈善への変化である。本来のクリスマスのメッセージである宗教性は、もはや教義を順守することにこだわるあまり、弱者救済や慈善精神が薄れていた。一方、Dickensが描く新しいクリスマスのメッセージは、経済という人間的な活動によって施される実効性のある慈善だ。これは、*A Christmas Carol*が文学作品というメディアとして伝えるメッセージである。しかし本作品は同時に、Dickensが収入増を狙って出版したように、市場における商品であり、現実における経済活動の1つである。すなわち本作品は、物語世界内部のみならず、現実の世界においてもクリスマスの宗教性から経済性への転換を加速させ、またそれによって神ではなく人間による慈善の精神を加速させた。以上の分析は、Dickensがクリスマスを創った、あるいは絶対的に再定義したというのではなく、Dickensはクリスマスや慈善精神が世俗化、大衆化しつつあったことを認識し、それを作品内部で描き出し、また現実において加速させたということを明らかにする。

<キーワード>: Charles Dickens、*A Christmas Carol*、メディア論

祭りはメディアである。このように言明されることは少ないように思われるが、しかし

祭りは確かにメッセージを伝える機能をもつ。例えば『『クリスマス・キャロル』の生と死』という論文で道家英穂は、古代ローマのサトゥルナリアについて「普段の規律を破って羽目を外すことが大目に見られ、賭け事も公認された。奴隷も宴席に連なって主人と立場を逆にするなどの無礼講が許された」(8)と説明する。日常の終り、秩序の崩壊は差異に他ならない。それはGregory Batesonが“news of difference”(64)の名で呼ぶもの、すなわち情報であり、祭りによって伝達されている。しかも祭りの終りはまた別の差異、つまり日常への回帰、秩序の回復を意味する。だから祭りはメディアである。

ならばクリスマスもメディアであり、伝達する情報があるはずである。それは本来、クリスマスが冬至の時期に設定されたことにも関連して、キリストの死と復活という純粋に宗教的なものであった。しかし現在のクリスマスは、家族が集まる日であり、また商業的な消費を促す日でもある。19世紀にはCharles Dickensが、*A Christmas Carol*の大ヒットを受けて4冊のクリスマスブックを発表し、その後も自身が編集した雑誌にクリスマスストーリーを載せるようになった。同時代人であるBeatrix Potterが初めて絵を売って金を稼いだのはクリスマスカードの制作によるし、現代でさえBob Geldofを皮切りにクリスマスのための音楽活動が行われている。またクリスマスセールや、クリスマスの時期に合わせて製作、放映されるハリウッド映画のような習慣もその影響を受けていると考えられる。もちろん、祭りにはそもそも消費活動が伴う。例えば*A Christmas Carol*では、食料品店や果物屋が大いに賑わっていると言及されており、またScroogeはクリスマスを出費のかさむ時期であると繰り返す。しかしそのような出費は、つまりクリスマスのための特別な食事や飾り付けは、経済活動というよりはむしろ宗教行為であるといえる。一方で出版や音楽活動は、たとえクリスマスを題材にしても、市場原理に従った経済活動に他ならない。

家庭を中心とし、商業主義的性格をもつ現在のクリスマスは、イギリスでは19世紀に始まった。葛野浩昭は、イギリスにおけるクリスマスのサンタ(聖者)としてファーザー・クリスマス、クリスマスの習慣に合わせてオールド・ファーザー・クリスマスとニュー・ファーザー・クリスマスに分けて説明している。

もともとイギリスでは、宮廷を中心として、クリスマスの季節をどんちゃん騒ぎで祝う習慣がありました。これは種蒔きと農耕の神であるサトゥルヌスを祭った古代ローマの冬至祭を受け継いだもので、その大宴会の司会を務めた道化役がオールド・ファーザー・クリスマスでした。しかし、このクリスマスの騒ぎは、一六

五二年にピューリタン（清教徒）のクロムウェルによって禁止され、ファーザー・クリスマスもいったん姿を消してしまいます。ところが、一九世紀後半のヴィクトリア朝になってから、宴会の司会者ではなくて、クリスマス・プレゼントの贈り主としてニュー・ファーザー・クリスマスがあらわれます。(6-7)

当然ながら、ニュー・ファーザー・クリスマスの登場が現代にも続くクリスマスの誕生という訳ではない。プレゼントの贈り主という人格が現れるための環境が、それ以前、葛野によれば「一九世紀後半」以前にあったはずだ。ニュー・ファーザー・クリスマスを生むこととなった現在のクリスマスは、Dickensによって創られたと言われる。例えば、先に引用した論文で道家は次のように言う。

だがディケンズがクリスマスを創った、と言われる。それは……『クリスマス・キャロル』が、それまでのクリスマスの伝統を塗りかえ、それ以降現在に至るクリスマスのイメージを形成するほどに大きな影響力をもったからである。(9)

他にも、Peter Ackroydは“Dickens can be said to have almost singlehandedly created the modern idea of Christmas...” (34) と言っているし、20世紀初めにはJ. W. T. Leyが既に“Beyond question, it was Charles Dickens who gave us Christmas as we understand it to-day.” (324) と書いている。確かにDickensが、そして*A Christmas Carol*という作品がクリスマスそのものに大きな影響を与えたことは疑いの余地がない。そもそもクリスマスツリーやクリスマスカードのような、クリスマスに関わるものがイギリス国内で見られるようになったのが19世紀のことであり、当時のクリスマスは流動的な変化の中にあったと言える。そのような時代において軽便な紙、画一性と反復性をもつ印刷された言葉、文学というメディアによって理想的なクリスマスを描くことが、DickensやScroogeをクリスマスのイメージと結びつけたことは不思議なことではない。特に、Dickensが作品発表の際に多用した1冊1シリングの月刊分冊に対して、単行本として出版された*A Christmas Carol*は5シリングと高価でありながら、初刷6千部が数日の内に完売した。それだけでなく、1843年12月に出版された本作品は、1844年5月までに第7刷まで売り切れとなり、また1844年2月までに少なくとも8つの舞台化がなされた (Schlicke 98)。Dickens自身、自作の公開朗読を始めた1853年から没年1870年まで本作品をレパートリーに入れ続けた。海賊版が蔓延った

ことはもはや言うまでもないだろう。すなわち直接、間接を問わず、*A Christmas Carol*はDickensをクリスマスと結びつけるのに十分なほど多くの人々によって読まれ、見られ、聞かれた。事実、Dickensの死を知った少女が、クリスマスのおじさんも死ぬのかと尋ねるエピソードはよく知られている¹。

しかし、上に挙げたようにDickensがクリスマスを創った、あるいは再形成したと言われるにも関わらず、クリスマスそのものが変化し、絶対的に固定化されたわけではない。そうではなく、Dickensが行ったことはクリスマスが持つ意味、メッセージをずらしたに過ぎない。なぜならクリスマスはメディアであり、それ自体は枠組みだからである。時計の機能は時を伝えることだが、ある時刻に予定がある人にとってそれは、ただの時刻以上の意味をもつ。ただし、時計や時そのものが変わるということはいえぬ。つまり、Dickensが現在のクリスマスを創った、と言われるのは実際には、Dickensはクリスマスに商業性を付与したと言っていいかもしれない。あるいは、19世紀イギリスにおいてクリスマスの商業化はDickensとは無関係に徐々に始まっており、Dickensはそれをはっきり認識し、表現し、加速させたのだということの本稿で明らかにする。

もちろん、Dickensが直接的に市場に働きかけたために、クリスマスが経済的消費の日となった訳ではない。クリスマスをメディアとして捉えることの意味はここにある。メディア研究の古典とすべき*Understanding Media*の副題 (*The Extensions of Man*) にもあるように、Marshall McLuhanはメディアを人間身体の拡張であると主張する。つまり、メディアは人間の行動や社会の機能に影響するということだ。Dickensは、形を持たず、権威によって聞かされるだけであった宗教を、文学という読者に解釈の余地が残された形式に置き換えることで、クリスマスというメディアのメッセージをずらした。その結果、人間の行動や思考が変化することで経済活動の推進が起こったということを明らかにするのが、本稿の目的である。

第1節ではまず、*A Christmas Carol*において神が人に置き換えられる点を、聖書における7という数字との関連から読み解く。続いて、本作においてクリスマスは安息日として再設定されていることを検証し、またその安息日はチャリティの性質をもつ点を明らかにする。これは、本作品が文学作品として伝えるメッセージについて分析するものである。続いて第2節では、世俗化と経済の関係をメディア論的視点から考えることで、現実世界においてクリスマスが経済をメッセージとする理論的構造を明らかにする。最後に第3節では、作品発表の前後でcharityという語の用法にずれが生じている事実を確認することで、

本作品が現実世界においても世俗化を加速させたことを検証する。

1. A Christmas Carolと聖書における「7年間」の意味—宗教から経済へ

A Christmas Carolが文学作品として伝えるメッセージは、世俗化である。本作品ではキリストの死と復活がScroogeとMarleyの死と復活に、神の愛が人の慈善に置き換えられている。このことを作中と聖書における7という数字から検証する。本作は特に作中年代が設定されているわけではないが、Scroogeの共同経営者であったJacob Marleyが死んだのが作中時点の7年前であることだけは明かされる。

‘Mr. Marley has been dead these seven years.’ Scrooge replied. ‘He died seven years ago, this very night.’ (11)

つまり、本作の時代がいつかは分からないが、ある時点から数えて7年目であることだけは疑いの余地がない。

7という数字は聖書の中で度々意味をもつ数字であるが、本作との関係では創世記に登場するイサクの子ヤコブに注目する必要がある。7年目に幽霊として現れたMarleyは、ヤコブの名をもつからである。創世記においてヤコブは兄エサウを出し抜き、父イサクを騙し祝福を得るが、そのために逃亡を余儀なくされる。エサウによって字義的な死を与えられる代わりに、ヤコブは比喩的な死を選ぶのだ。その中であって、彼は天の門に至る。

ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」(創世記 28:16-17)

生前富を追い求め続けたMarleyが、死後改心し、神によって救われる術に気づくのは、まさにこの場面と一致する。創世記ではその後、ラバンの娘を妻に迎えるためにヤコブが7年間の労働を行う。このとき、ヤコブが結婚を望んだ妹ではなく姉を妻としなければならなかったために、彼はさらに7年の労働に就く。ここで、7年間という期間を使ってヤコブが為すのは結婚だけではなく、神の祝福を得ることである。彼は最終的にイスラエルの名

を授かり、土地をも獲得するが、そこで神は「産めよ、増えよ」と言う。彼が7年をかけて結婚したことは、結果として世代をつなぐ条件を整えたことであった。

神は、また彼に言われた。「わたしは全能の神である。産めよ、増えよ。あなたから一つの国民、いや多くの国民の群れが起こりあなたの腰から王たちが出る。わたしは、アブラハムとイサクに与えた土地をあなたに与える。また、あなたに続く子孫にこの土地を与える。」(創世記 35:11-12)

7年という期間は、死によって神の意思を発見した者が復活するのに必要な時間なのだ。

*A Christmas Carol*においても同様に、7年間を経て死者が神の意思を発見する。本作品で死と復活を遂げるのはMarleyであり、またScroogeでもある。なぜなら、死んだMarleyは生きたScroogeだからである。物語冒頭でMarleyは死んでいるという情報が、“dead as a door-nail”という表現を用いながら繰り返される。一方でScroogeの店の看板にその名は残り続け、しかもScroogeはMarleyの名を呼ぶ声にも返事をする。

Scrooge never painted out Old Marley's name. There it stood, years afterwards, above the warehouse door: Scrooge and Marley. The firm was known as Scrooge and Marley. Sometimes people new to the business called Scrooge Scrooge, and sometimes Marley, but he answered to both names. It was all the same to him. (8)

Scroogeにとって彼の名とMarleyは全く同じであるが、そのMarleyは冒頭で繰り返されるように死んでいなければならない。つまり、ここでScroogeと同じ者として扱われるMarleyは、経済的成功を第一に考えるMarleyではなく、神の意思を実現するMarleyなのだ。Karen Oshimaが“The old Scrooge dies on Christmas Eve, the anniversary of Marley's death, and the new one is born on Christmas day.”(106)と言うように、二人が共にクリスマス・イブに死ぬことも、両者を重ねあわせている。事実、クリスマスの幽霊が訪問しなければ、ScroogeはMarleyが死後歩むのと同じ道を辿ることになると、Marleyの幽霊は言う(21)。クリスマスを祝う心をもたないScroogeは、作中で死ぬことで神の意思に至り、クリスマスを心から祝う人間として復活する²。ただし、この死と復活は一見幽霊という超自然によってなされるように見えるが、実際にはScrooge自身が、しかも労働と富の分配、すなわちチャ

リティによって達成するものなのだ。

聖書では7年目が安息年として設定されていることに注目しなければならない。

あなたは六年の間、自分の土地に種を蒔き、産物を取り入れなさい。しかし、七年目には、それを休ませて、休閒地としなければならない。あなたの民の乏しいものが食べ、残りを野の獣に食べさせるがよい。ぶどう畑、オリーブ畑の場合も同じようにしなければならない。(出エジプト記 23: 10-11)

Marleyの死から7年目であることに加え、改心したScroogeが多額の寄付をし、貧しいBob Cratchitの給料を上げ、また匿名で七面鳥を贈ることで、本作はクリスマスを安息年として設定する。対象が土地であるか、人や家畜であるかの違いこそあるものの、安息の制度化という点でここでは安息日と安息年を同一視する。新約聖書においてイエスは、一切の労働が禁止される安息日に麦の穂を摘んでいる。

ある安息日に、イエスが麦畑を通って行かれると、弟子たちは麦の穂を摘み、手でもんで食べた。ファリサイ派のある人々が、「なぜ、安息日にはしてはならないことを、あなたたちはするのか」と言った。イエスはお答えになった。「ダビデが自分も供の者たちも空腹だったときに何をしたか、読んだことがないのか。神の家に入り、ただ祭司のほかにはだれも食べてはならない供えのパンを取って食べ、供の者たちにも与えたではないか。」そして、彼らに言われた。「人の子は安息日の主である。」(ルカ伝 6: 1-5)

キリストは、このように安息日を解釈しなおす。それは、労働の否定による安息ではなく、満たされない者に安息を与えることであり、その手段として労働は否定されない。キリスト教の革命は、形骸化された律法の再解釈にある。「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。」(マルコ伝 2: 27) というのは、ユダヤ教において守ることが最大の目的となっていた安息日を、真に人のためのものとして再解釈するものである。しかし、そのキリスト教さえ19世紀には形骸化されていた。Dennis Walderは*Dickens and Religion*の中で次のように言っている。

Dickens tends to reject, or at least ignore 'positive religion'.... For Dickens... 'positive religion' represented a sterile reliance upon the merely credal or doctrinal element in belief, and his opposition to it sprang from a Romantic sense of Christianity as a religion of the heart, a religion based upon deep feelings about man, nature and God. (91)

だからこそ *A Christmas Carol* という作品は、安息日にさらなる意味づけを行う。それは経済という、むしろ積極的な労働による救済、安息であり、教義を遵守するよりも実践的で現実的な新たな安息日としてのクリスマスの創出といえるかもしれない。そもそもユダヤ教において土曜日に設定されていた安息日が、キリスト教において日曜日に再設定されたのは、キリスト復活の日と結びついたからである。だから、物語中で Scrooge が死と復活を果たし、しかも復活するのがクリスマスの朝であることは明らかに、Scrooge が復活したクリスマスを安息日として再設定する意図がある。

以上のように本作品は、キリストではなく Scrooge の、つまり神でも特権的な地位にある者でもなく、ただの人間の死と復活を描いている。しかも彼が復活するクリスマスは、純粹に宗教的なものとしてではなく、キリストの教えを経済レベルにまで拡大させた人間の慈善が行われる日として描かれる。しかしこれは、Dickens が「現在のクリスマスの創始者」として、現実には即さないクリスマスを描いたからではない。Dickens は、クリスマスというメディアのもつメッセージのずれと、それによる人や社会の変化を察知したために、*A Christmas Carol* という物語内部でそれを描いてみせた。同時にこの作品は、出版されれば現実の世界におけるモノ＝メディア³でもある。しかもそれは、Dickens が収入増を図って出版した、市場における商品である⁴。だからこそ、Dickens が描いた現代的なクリスマスのあり方、あるいは宗教から経済へ、神から人への世俗化が現実の世界において加速された。その構造をメディア論的な視点から次節で検証したい。

2. メディア論から見る世俗化と経済の関係

経済活動とは、本来交換による利潤の追求を意味する。1776年に出版された *The Wealth of Nations* は、経済学に大きな影響を与えた。この中で Adam Smith は、人間は他者と交易、交換する性向をもつと主張しており (13)、その背景にあるのは他者への配慮ではなく自らの利害への配慮、自己愛であるとしている (14)。こうして、各々が自分の利益のために交換を行うことで自然に、つまり人間の思惑や行動とはまったく無関係に、市場は適切な状

態に向かうのだと、有名な“invisible hand” (423) を用いて説明する。

19世紀の経済学者Karl Marxもまた、商品のもつ2つの価値で同様のことを説明している。すなわち、消費者の欲求を満たす“use-value”と、交換に用いられる“exchange-value”が商品には備わっているというのだ⁵ (36)。

A Christmas Carolが描く経済活動は、決して単純な労働や価値の交換ではない。それは、Marleyの幽霊が語るように、チャリティであり、しかも人間レベルで行われるものなのだ。

‘Business!’ cried the Ghost, wringing its hand again. ‘Mankind was my business. The common welfare was my business; charity, mercy, forbearance, and benevolence, were, all, my business. The dealings of my trade were but a drop of water in the comprehensive ocean of my business!’ (20)

charityという語は、King James 訳聖書のコリント人への手紙I 13:13に見られるように、神の愛を意味する。クリスマスにおけるチャリティは、神がその愛を分配することであったはずだ。しかしMarleyは、そして改心したScroogeは、人間による富の分配がチャリティであることに気がつく。

それは、教条的なものから実効性のあるものへの変化という点で経済と結びつくだけでなく、メディア論的な視点からも経済と関係する。石板や粘土板に文字が書かれた時代、情報や知識は限られた富裕層や知識人に独占された。パピルスや紙が情報伝達的手段となったとき、この独占は崩壊し、広い範囲の人間が情報を得ることが可能になった。これと全く同じように、元来神による愛の分配であったチャリティが、今や人間による富の分配となったということは、重大な情報加速が発生したことを意味している。だからこそ、ここで経済が重要な意味を持つ。

The issue of acceleration is paramount. In a stable culture, where technological turnover is slow, it is the state that supports and controls culture. When technological innovation accelerates, market forces take over. The task of collective harmonization and psycho-sensorial education is given to popular culture. (Kerckhove 172-73)

Derrick de Kerckhoveのこの主張は、情報が電気の速度にまで加速された時代における現象

を指摘するものであるが、しかし19世紀イギリスにおける情報加速はこれと全く同質のものである。例えば文筆業の収入源がパトロンによる援助に限定された時代では、すなわち情報速度の遅い時代では、文学という文化は決して市場と大衆の影響を受けなかった。一方で、出版業者の登場は文学作品に商品価値を付与することになる。あるいは長距離移動が困難であった時代、自家用馬車をもつ一部の富裕層のみに許された旅行は、鉄道や蒸気船の登場によって広く大衆に門戸が開かれたとき、旅行業という市場を生み出すことになる。ならば、神の博愛と、教会におけるパンとワインに限定されていたクリスマスの愛の分配が、ScroogeやMarleyという個人の富の分配にまで拡大したとき、そこに市場原理が働くことに疑問の余地はない。

Dickensが*A Christmas Carol*で描き出すのは、実は情報速度の加速によるクリスマスの大衆化と市場原理の介入という社会現象なのだ。これこそ、神の愛が個人の慈善を通して分配されるための労働、すなわち本来キリストが安息日に見出す意味であり、クリスマスが新たな安息日としてメディア化される瞬間である。特権階級による知識や資本の独占が崩壊したこの時代に、神や神秘もまた俗化されたと言える。本作以前には形而上のメディアであったクリスマスは、個々の人間という実体を伴い、我々に認識可能な市場という情報に加速を加えるメディアとなった。

*A Christmas Carol*がモノ＝メディアとして、現実世界におけるクリスマスの世俗化を促したことは、日本の伊勢参りに見られる宗教性から経済性への転化に似る。本来寺社詣で、参拝という宗教行事であった伊勢参りは、江戸中期になると旅行業者である御師や、名所案内の出版物が登場するほどの経済性をもつようになる。また、伊勢へ向かう間は宗教的な禁欲性が見られるこの参宮は、村へ帰るときには観光旅行であったことはよく知られる。この背景にあるのは、街道や宿場というメディアの整備、情報速度の加速のみならず、チャリティの存在があった。

通説によると、路銀を持たずとも伊勢参宮ができるという噂がとびかい、それがより多くの人を誘うことになった。……それからして、道中各所に施行、接待の法が発達したことは、ほぼ明らかである。(旅の文化研究所 7)

このような道中で受ける慈善のみならず、伊勢講のシステムも興味深い。これは、一地域の人々が少しずつ金を出し合い、くじに当選した者が代表として伊勢参りに行くことが

できるというものだが、だからこそ代表者は土産を買い、地元を持ち帰る。ここにも、チャリティと経済の関係が見られる。この現象をまとめると、宗教行為であった伊勢参りに観光という経済的な意味が見出され、その結果多くの人に参加したいと思うようになる。純粋な信仰心のみでは達成不可能なその欲求を可能にしたのが、旅費の負担や道中の接待のような人による慈善活動であり、そのためにさらに経済性が加速された。天下泰平、五穀豊穰という神による施しが、旅費の共同負担という形で人による施しになったとき、けっして宗教性が失われるわけではないにせよ、そこには経済性が発生する。Dickensが*A Christmas Carol*の中で行ったこと、あるいは発信したことは、まさにこの転換に他ならない。

3. 神の愛から人の慈善へと変化する charity

本作品が発表された1843年頃を境に、charityという語の用いられ方そのものにずれが生じている。本稿では、*OED*における例示を参考にこの事実を検証した⁶。

*OED*でcharityという語を引くと、4番目に経済的弱者への施しという意味が見られる⁷。“Benevolence to one’s neighbours, especially to the poor; the practical beneficences in which this manifests itself.” ここには「キリスト教的な」という記述は見られず、むしろpractical beneficencesであると書かれている。それにも関わらず、*A Christmas Carol*が出版された1843年以前には、charityという語は宗教的な文脈の中に見られる。あるいは、少なくとも個人レベルで行われる慈善ではない。例えば1758年の例でSamuel Johnsonは、charityと啓示、天啓との関係を感じている。また、1530年のHenry8世によるPublic Actは、資格を持たない者が物乞いをした場合の罰則が主な内容である (Tomlins 91-92)。これは、*A Christmas Carol*冒頭で改心する前のScroogeが、貧乏人を収容すべき場所として牢屋や救貧院に言及するのと同じである。続いて1605年*King Lear*の引用は、“Do poor Tom some charity, whom the foul fiend vexes:” (3.4.54) と誰にともなく言う場面である⁸。この場面ではEdgarが狂人のふりをしているため、文脈からcharityの用法を断定しがたいが、比喩的であれ悪魔に苦しめられている以上、少なくとも宗教性がないと断ずることはできない。1662年の例は、“ROBERT THORN... gave more than four thousand four hundred forty-five pounds to pious uses.... Our Thorn was... doing his charity effectually, but with a possible privacy.” (Fuller 119) とあるように、宗教的な意味のあるpious usesである⁹。1737年の例の前後は以下の通りである。

Not but there are, who merit other palms;
Hopkins and Sternhold glad the heart with psalms:
The boys and girls whom charity maintains,
Implore your help in these pathetic strains:
How could devotion touch the country pews,
Unless the gods bestowed a proper Muse? (Pope 65)

これも宗教的な文脈における charity であり、また charity が直接指すものは慈善学校か孤児院のような施設であると考えられる。最後に 1818 年の例が含まれる詩の連を引用する。

Away, thou lover of the race
That hither chased yon weeping deer!
If nature's all majestic face
More pitiless than man's appear;
Or if the wild winds seem more drear
Than man's cold charities below,
Behold around his peopled plains,
Where'er the social savage reigns,
Exuberance of woe! (Campbell 167)

これは宗教的ではないものの、人が行うのは charity ではなく “cold charity” とされる。

一方、1843 年以降の例は必ずしも宗教的ではなく、また救貧院のようなその場しのぎの救済でもない。例えば 1878 年の例として挙げられる William Jevons は、貧しい者に対する単純な施しが、結果的に物乞いをする者の数を増やしている点、および彼らの生活そのものを改善しなければより状況を悪化させる点を指摘し、以下のように主張する。

Political economy proves that, instead of giving casual ill-considered alms, we should educate people, teach them to work and earn their own livings, and save up something to live upon in old age. (9)

これは、*A Christmas Carol*における第2の幽霊がIgnoranceとWantという子どもに言及し、無知が破滅につながると話す場面に通ずる。

This boy is Ignorance. This girl is Want. Beware them both, and all of their degree, but most of all beware this boy, for on his brow I see that written which is Doom, unless the writing be erased. (57)

さらに1884年の例は次の通りである。

"What does a little creature like that eat?" said she. "A bit of bread, a little soup – macché! You will never notice it, I tell you. And the poor thing has been living on charity. Just imagine whether you are not quite as able to feed him as Gigi is!" (Crawford 5)

また1870年の例は次のような文脈の中で見られる。

He [The farmer] is the continuous benefactor. He... makes a fortune which he cannot carry away with him, but which is useful to his country long afterwards. The man that works at home helps society at large with somewhat more of certainty than he who devotes himself to charities. If it be true that... by the eternal laws of political economy, slaves are driven out of a slave State.... (Emerson 126-27)

以上2つの例では、全く宗教と無関係に、個人による慈善、親切な行いを指す語としてcharityという語が使われる。しかもそれは、上に位置する者から下位の者へという性質でもない。

このように、少なくともOEDに見られる限りcharityの用法は19世紀、あるいは*A Christmas Carol*の発表の前後で確実にずれが生じている。当然ながら、これはDickensがcharityという語から宗教性を除いたと主張するものではない。この変化が生じた原因として、前節にも挙げた文学の大衆化が考えられる。文学作品の執筆者が、パトロンを得ることのできる一部の人間に限られる場合、charityという語の用い方に宗教的な意味、あるいは上位から下位へという構造が入り込むのは当然だろう。しかし、出版社の登場によって

庶民に近い立場の作家が現れるようになると、charityは必ずしも宗教的である必要はなくなる。クリスマスが宗教的なものから経済性をもったものへと転じたことを、Dickensが敏感に察知し作品を発表することで加速させたのと同じように、charityの行為者が神から人へ転じるこの現象もまた、*A Christmas Carol*によって加速されたと言えるだろう。

結論

以上のように、*A Christmas Carol*で描かれるクリスマスは、人間を中心とした実効のある慈善行為、チャリティである。それは、もはや形骸化し、人のためのものではなくなっていた本作品以前のクリスマス、すなわち形而上的な神の愛が分配される純粋に宗教的・教条的なものとは異なる。本作品ではMarleyの幽霊が語るように、また改心したScroogeが実際にBob Cratchitの給金を上げるように、経済活動を通じた現世における富の分配こそが、クリスマスの慈善精神として描かれる。これは、キリストが安息日に麦を摘んだように、教義の順守ではなく、弱者の救済を目的とする精神だ。

こうした情報加速は物語世界内部に限られない。クリスマスの宗教性から経済性への変化や、チャリティが神から人のものへと変化したことは、作品とは無関係に現実には起こりつつあった。それはKerckhoveが言うように、メディアの発達、技術の進歩によって大衆が主体となると、避けがたいものである。*A Christmas Carol*という作品は、文学作品としてそのコンテンツを伝えるのみならず、例えば現代でさえDickens個人のイメージを強烈にクリスマスと結びつけるように、現実世界における物そのものとして意味、メッセージをもつ。しかもそれは、一部の限られた者だけが触れることのできる物ではなく、市場における商品として広く誰もが手にする機会のある物である¹⁰。つまり、本作品が現実世界において物としてもつメッセージは、人間レベルに加速されたクリスマスのあり方そのものなのだ。だからこそ、新しいクリスマスの創出と思われるほどの、明確な世俗化が促された。

これは伊勢参りが、旅費負担の軽減によって多くの人が実行できるようになった結果、観光としての意味を強めたことと同じ構造をもつ。一部の人間が富や知識、手段を独占するのではなく、広く大衆の手に行き渡らせるというこの構造は、多くが教養人のものであった文学が大衆の娯楽になったことや、富裕層に限らず旅行ができるようになったことと同じく、19世紀における情報加速の1つと言える。Dickensが描くクリスマスの世俗化は、クリスマスを絶対的に創り変えるものではなく、現実には起こりつつあったクリスマスという

メディアのメッセージのずれを加速させることであったのだ。

Dickensという作家は19世紀に起こった神の世俗化、人や技術が宗教に取って代わる現象、形而上から形而下への移行を作品内で表現するのみならず、その作品によってこの変化を推し進めたといえる。その点でDickensとその作品は、一般に小説がメディアとして語られるときの、メッセージを発するものとしてだけではなく、むしろ既存のメディアを再メディア化するものとして位置付けられる必要がある。

(注)

(本稿は、第66回日本英文学会九州支部大会(2013年10月26日)のための草案を加筆改稿したものである。)

¹ 実際にこの少女の発言を聞いたTheodore Watts-Duntonは、*The Coming of Love*において“A ragged girl in Drury Lane was heard to exclaim ‘Dickens dead? Then will Father Christmas die too?’”(191)と記している。

² Scroogeの死と復活は、作中の時間では1日の内に果たされているように見える。しかし、Yumiko Hironoが作中の時間の流れを追いながら“This, however, does not seem to match the actual time Scrooge spends sleeping.”(49)と指摘する通り、現実的な時間感覚で捉えられるものではない。

³ ここでは、文学作品という読まれるメディアと物そのものとして意味をもつメディアを区別するためにモノ＝メディアと呼んでいる。これは映像や音声が一体化したマルチメディアに対して、映像のみ、音声のみを指す場合のモノメディアとは異なる。

⁴ *Christmas Books*の序文で、Eleanor Farjeonは“He decided to throw off a complete Christmas book in the intervals of writing the monthly serial parts of *Chuzzlewit*, to relieve certain disturbing financial complications he was suffering through an unsatisfactory arrangement with his publishers.”(vii)と説明する。

⁵ 商品のもつ2つの価値について、Adam Smithも同様に“The one may be called ‘value in use;’ the other, ‘value in exchange.’”(28)と言っている。

⁶ *The Oxford English Dictionary*. 2nd edn. Oxford: Clarendon Press, 1989. 本稿におけるOEDからの引用は全てこの版による。

⁷ *Oxford Latin Dictionary*によると、charityの語源であるcāritāsには、他者への施しという意味はない。

⁸ 本稿における*King Lear*の引用はRSC版テキストからであり、OEDの用例とは綴りが異なっている。

⁹ 本論とは直接関係ないため省略したが、引用文中の“a possible privacy”は、音をたてて自らの寄付を他者に知らしめる者と反対に、Thornは人知れず寄付を行ったことを指す。

¹⁰ *A Christmas Carol*は、1冊5シリングで売りだされ、Dickensが作品発表に多用した1冊1シリングの月刊分冊と比べると非常に高価だが、豪華な装丁や色刷りの挿絵から考えれば低価格であり、事実Dickensにとっては経済的な失敗であった。また、注1にあるように“ragged girl”がDickensをクリスマスと結びつけていたことを考えると、決して庶民の手の届かないものではなかったと思われる。

<引用文献>

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Sinclair-Stevenson, 1990. Print.

Bateson, Gregory. *Mind and Nature: A Necessary Unity*. New Jersey: Hampton, 2002. Print.

Campbell, Thomas. "Lines on Scene in Bavaria." *The Poetical Works of Rogers, Campbell, J. Montgomery, Lamb, and Kirke White*. Philadelphia: Carey & Lea, 1880. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.

Crawford, Francis Marion. *A Roman Singer*. Boston: Houghton Mifflin, 1884. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.

Dickens, Charles. *A Christmas Carol*. *Christmas Books*. Intro. Eleanor Farjeon. London: Oxford UP, 1966. 7-76. Print.

Dunton, Theodore Watts. *The Coming of Love: Rhona Boswell's Story and Other Poems*. 4th edn. London: John Lane, 1899. Print.

Emerson, Ralph Waldo. *Society and Solitude and Other Essays*. Boston: James R. Osgood, 1871. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.

- Fuller, Thomas. *The History of Worthies of England*. Vol. III. London: Thomas Tegg, 1840. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.
- Jevons, William Stanley. *Political Economy*. 2nd edn. London: Macmillan, 1878. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014
- Karen, Oshima. "Life, Death, and Christmas in Charles Dickens's *A Christmas Carol*." 『島根大学外国語教育センタージャーナル』2号、2007年。101-09. Print.
- Kerckhove, Derrick de. *The Skin of Culture: Investigating the New Electronic Reality*. Ed. Christopher Derdney. Toronto: Somerville House Publication, 1995. Print.
- Ley, J. W. T. "The Apostle of Christmas." *Dickensian* 2. 12 (1906): 324-26. *ProQuest*. Web. 15 Dec 2014.
- Marx, Karl. *Capital*. Trans. Samuel Moore and Edward Aveling. Moscow: Progress Publishers, 1965. Print.
- McLuhan, Marshall. *Understanding Media: The Extensions of Man*. New York: Routledge, 2001. Print.
- Partridge, A. C. *English Biblical Translation*. Ed. Eric Partridge and Simon Potter. London: Andre Deutsch, 1973. Print.
- Pope, Alexander. *The Poetical Works of Alexander Pope*. London: William Pickering, 1835. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.
- Schlicke, Paul., ed. *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Oxford: Oxford UP, 1999. Print.
- Shakespeare, William. *The Tragedy of King Lear*. *The RSC William Shakespeare Complete Works*. Ed. Jonathan Bate and Eric Rasmussen. Houndmills: Macmillan, 2008. 2004-80. Print.
- Smith, Adam. *The Wealth of Nations*. Ed. Edwin Cannan. Tokyo: Charles E. Tuttle, 1982. Print.
- Raithby, John., ed. *The Statutes at Large of England and of Great Britain*. Vol. III. London: George Eyre and Andrew Strahan, 1811. *Google Books*. Web. 15 Dec 2014.
- Walder, Dennis. *Dickens and Religion*. London: George Allen & Unwin, 1981. Print.
- Yumiko, Hirono. "Scrooge as a Time Traveler." *Dickens in Japan: Bicentenary Essays*. Eds. Eiichi Hara, Midori Niino, Mitsuharu Matsuoka, Toru Sasaki. 大阪教育図書、2013年。48-61. Print.
- "Cāritās." *Oxford Latin Dictionary*. Ed. P. G. W. Glare. Oxford: Clarendon Press, 1982. Print.
- "Charity." *The Oxford English Dictionary*. 2nd edn. Oxford: Clarendon Press, 1989. Print.
- The Holy Bible*: King James Version. New York: Oxford UP, 1998. Print.
- 葛野浩昭 『サンタクロースの大旅行』岩波書店、1998年。Print.
- 道家英穂 「『クリスマス・キャロル』の生と死」『専修人文論集』87号、2010年。1-24. Print.
- 旅の文化研究所編 『絵図に見る伊勢参り』河出書房、2002年。Print.
- 『聖書』新共同訳、日本聖書協会、2001年。Print.